

# 寿岳文章のウィリアム・ブレイク研究

東京大学大学院総合文化研究科教授 佐藤 光

寿岳文章（1900-92）は英文学者、書誌学者、和紙の研究者として知られています。寿岳の全体像については、中島俊郎先生の「ある英文学者の肖像：寿岳文章」（2012）があり、寿岳が編纂したブレイク書誌については、磯部直希氏の『『キルヤム・ブレイク書誌』にみる民藝運動の揺籃期』（2008）があります。寿岳文章の仕事に関する研究は、ようやく始まったばかりです。今日は、ブレイク研究者としての寿岳文章に注目し、寿岳のブレイク研究の特色とその意義を明らかにしたいと思います。

## （1）寿岳文章とブレイクとの出会い

寿岳文章は現在の神戸市西区押部谷町にあたる「播磨の山村の貧しい寺院に、五人きょうだいの末弟として生まれ」ました（『私の英学事始』）。尋常小学校五年生を修了する十歳の時に、姉夫婦の養子となり、苗字が寿岳に変わります。1914年に、真言宗立京都中学（現在の洛南高校）に編入学して、寮生活を送りました。京都で寿岳はブレイクの作品に出会います。寿岳は柳宗悦とともに月刊誌『ブレイクとホキットマン』（1931-1932）を始めた時、その第1巻第1号に「ブレイク研究への序説」という随筆を寄せ、次のように記しました。

私の追憶は、私の中学生時代へ遡る。播磨の山奥から京都へ出てきた少年の心をいち早く捕へたものは、書店の存在であつた。私の足は殊に屢々烏丸仏光寺を東に入つた所にある東枝と云ふ書店へ赴いた。当時その店は最も敏速に新刊の書物を取り揃へてゐたかと思ふ。大正三年の夏のある日、私の眼はその本屋で薄茶色の紙表紙に包まれた雑誌‘未来’の第二輯に釘づけされた。それは中学二年生が読むには余りに高級な雑誌であつた。だが頁をめくるうちに、私の心は山宮允氏の訳出にかゝる‘ブレイクの詩集より’の幾つかの詩にいたく惹きつけられた。同じく山宮氏の訳されたブレイクの神曲挿画に関するエイツの一文は当年の私にとって余りに難解であつたけれども、奇異なる藝術家ブレイクの存在は、そこに複製された肖像と共に、感じやすい少年の心に深くも刻みこまれた。柳宗悦氏の‘キリアム・ブレイク’を手につけて、まづ数数の挿画に魅せられたのも、その本であつたかと思ふ。だがそれは、一ヶ月八円で暮してゐた

中学生には余りに高価であつた。（「ブレイク研究への序説」）

「東枝と云ふ書店」とは、東枝吉兵衛（1848-1934）が経営する東枝書店と思われます。京都府女子師範学校附属小学校研究部が刊行した『児童教養手帖』（1910）の奥付には、発行兼印刷者として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝吉兵衛」、発行所として「京都市仏光寺通烏丸東入 東枝書店」という記載が見えます。東枝書店は書籍の小売業以外に、出版業を営んでいたようです。なお、徳富蘇峰が設立した民友社の機関誌『国民之友』（1887-98）の1巻9号と1巻10号の巻末には、『国民之友』を扱う書店の一覧が「国民之友売捌所」として掲載されており、「京都仏光寺通り烏丸東入上柳町 東枝律書店」が含まれます。東枝吉兵衛は王陽明選『古本大学』（1882）、『改正区町村会議全書』（1884）、京都市参事会編『伯林市行政ノ既往及現在』（1901）などの出版を手がけており、東枝書店は京都における情報の配電盤として機能していたのでしょう。

この書店で寿岳は雑誌『未来』第二輯に出会います。ここには「ブレイクの詩集より」という表題のもとに、山宮允が訳出した『無垢の歌と経験の歌』（*Songs of Innocence and of Experience*, 1794）に由来するブレイクの7編の詩と、「ウィリアム・ブレイクとその神曲の挿画」と題して山宮が訳したW・B・イェイツのブレイク論が収録されていました。『未来』第二輯が出たのは1914年6月のことなので、寿岳が記した「大正三年の夏のある日」と辻褃が合います。この年の12月に柳宗悦の大著『キリアム・ブレイク』が洛陽堂から刊行され、寿岳は東枝書店でこれも手に取ったようです。同書の定価は三円でしたので、「一ヶ月八円で暮してみた中学生には余りに高価であつた」と寿岳が回想するのも無理はありません。寿岳はブレイクに惹かれた理由について、続けて次のように語りました。

自分でも変な象徴詩風の詩を作つて校友会の雑誌などに寄せてみた私は、ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、‘病める薔薇’などを愛誦してみたのであらうと思ふ。（「ブレイク研究への序説」）

自作の詩を雑誌に投稿していたところから、旧制中学時代から寿岳が既に文学に強い関心を持っていたことがわかります。おそらくそれは、寿岳少年がそのような文化的環境で育まれたからでしょう。たとえば、寿岳は実家の兄について、次のような思い出を語ります。

兄一人、姉三人、私は末子である。のちに東北大学の理学部数学科を出て、第一生命にはいり、第二次世界大戦が終ってからはその副社長をしていた亡兄・鈴木敏一の苦学時代、休暇で帰ってきた二十歳前後の兄は、五歳前後の私を庭へつれ出し、松の古木をぐるぐる廻って鬼ごっこをした。私の手が兄の袖に触れそうになると、兄は“dangerous”と叫んで、つと私から離れる。「おッとあぶない！」という意味の英語を、私に覚えさせる魂胆だったのだろう。私はそれを「デンジャラ・ウス」と受けとり、猿蟹合戦の物語に結びつけ、ウスが頭上に落ちてくるからあぶないのだと連想した。この要領で私は兄から十いくつかの英単語を教えられたが、“dangerous”の記憶だけが少しも薄れないのは、それが私の覚えた英単語第一号だからであろう。

兄から聞き覚えた英語やフレーズを「デンジャラ・ウス」式に片仮名でしるしておいた小さな帳面が、かなり後まで故郷の寺にあった。（「私の英学事始」）

別の随筆によると、寿岳とその兄との間には十七歳の年の差があったそうです（「わが青春」）。幼い寿岳少年にとって、東北帝国大学理学部数学科に通う兄は、文字通りに仰ぎ見るような存在と映ったことでしょう。大学生の兄が年の離れた幼い弟の遊び相手をしながら、英語の単語を教えようとする光景は微笑ましいものです。この微笑ましい光景において、寿岳少年の反応に注目したいと思います。寿岳少年は、馴染みのない“dangerous”という英語の単語を理解するために、猿蟹合戦の昔話から、臼が屋根から落ちてくる場面を想像しました。「デンジャラ」は落ちてくる臼の擬音語としても解釈できます。おそらくここで重要なのは、“dangerous”という英単語の意味として「おッとあぶない」という日本語を暗記するのではなく、寿岳少年が自分の頭で考えて、自分の親しんだ言葉に置き直したということでしょう。ここに見られるのは、与えられた知識を鵜呑みにするのではなく、幼いながらも主体的に理解しようとする姿勢です。語呂合わせによる古典的な英単語記憶法ではありますが、未知のものを既知のものに引き寄せて、その類似を手掛かりにして理解するという方法は、未知のブレイクを既知の仏教思想で理解しようとした寿岳のブレイク研究の方針と重なります。寿岳少年の「デンジャラ・ウス」式英単語理解は、寿岳が関西学院に提出した卒業論文「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華嚴思想の用語」の発想を先取りするものであった、と言えるのではないのでしょうか（筆者注。本講演会の当日に井上琢智関西学院大学前学長の御厚意により、寿岳文章の卒業論文の複写を閲覧することができた。この複写を見る限り、寿岳が関西学院に提出した卒業論文の正式な題目は「ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」である。「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」の中で、寿岳が卒業論文の題目として

記した「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華厳思想の用語」は、論文の内容を説明するためのものだったようである)。

さて、寿岳は中学生時代について、次のように振り返ります。

宗門の中学だけに、仏典や漢籍の先生はそろっていたが、英語ははなはだしい玉石混淆であった。玉は当時の京都帝国大学文学部に在学するかたわら、学資かせぎに教えにきていた学生たち、石は義兄と同様多少英語がわかる程度の僧侶。玉にめぐりあわかったら、おそらく私は英語や英文学をめざさず、生物学の方面に志していたかもしれない。生物学には会田竜雄という有名な先生がおり、その先生に私はすっかり心酔していたのである。(「私の英学事始」)

会田竜雄(1872-1957)は「メダカの体色遺伝研究」で学士院賞を受賞した動物学者であり、第五高等学校や京都高等工芸学校(現在の京都工芸繊維大学)などの教授を歴任しました。『アーロン収容所』で知られる会田雄次(1916-1997)の父親にあたります。寿岳が「玉」と呼ぶ京都帝国大学の学生から英語を習ったことで、寿岳の英文学に対する関心は深まったようです。

「英語青年」「中外英字新聞」などの英語研究雑誌の購読者となったのは、中学四年生の中頃からであったと思うが、「英語青年」はさすがに高級で、歯が立たず、主幹佐川春水の「英語の日本」に最も深くなじみ、親しんだ。(「私の英学事始」)

『英語之日本』は1908年から1917年まで続いた英語学習者向けの雑誌です。英米文学作品の紹介、日本の自然や文化に関する随筆、実用会話の例文などが、詳しい文法事項の解説とともに、英語と日本語の対訳形式で掲載されました。斎藤秀三郎(1866-1929)による「君が代」の英訳が載ったこともあります。『英語青年』と比べると、『英語之日本』は日本文化発信型の傾向があり、寿岳が「最も深くなじみ、親しんだ」理由はそこにあるのかもしれませんが。

愛読した英語学習雑誌に加えて、中学生時代に大きな影響を受けたのは、文法書であった、と寿岳は言います。

しかし、中学五年生のとき、市河三喜博士の『英文法研究』（大正元年初刊）と、細江逸記博士の『英文法汎論』（大正六年初刊）が私に与えた学問的興奮は格別である。中学卒業記念の修学旅行で、はじめて東京の土を踏んだとき、私が神田の古書店で、財布の底をはたき、Sweetの*New English Grammar*を買い求めたのも、まったくこの両書の影響によるものであった。学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ。（「私の英学事始」）

修学旅行で初めて上京した時に、「財布の底をはたき、Sweetの*New English Grammar*を買い求めた」という記述から、寿岳が英文法に強く魅了されたことがわかります。さらに重要なことは、英文法から英語という言葉の構造を学ぶだけでなく、「学問一般に通ずる科学的な研究方法」を学んだ、と寿岳が述べているところです。寿岳のブレイク研究は、寿岳が振り返るように、「ブレイクの思想をよくも知らずに、たゞその特異な表現法ゆゑに、『病める薔薇』などを愛誦」することから始まりましたが、やがて、ブレイク研究に関連する書籍や論文の書誌情報を網羅的に収録した『キルヤム・ブレイク書誌』を刊行するに至ります。先行研究の蓄積を年代順に整理し、その特徴を把握することは、主観的な批評ではなく、事実に基づいた実証的な研究を行う上で必要不可欠な作業です。寿岳の実証的な研究姿勢の基礎は、文法書を通して、英語という言葉の体系的に学習することによって形作られた、と言えるのではないのでしょうか。

この時代の中学生にとって、英文法が持った意味について、外山滋比古は次のように言います。

かつて、日本の中学生にも英語好きがすくなくなかった。どうして好きになったのかは、はっきりしないが、なんとなくおもしろかったのである。新しいものにふれるよろこびのほかに、文法の知識が知的で、それによって頭が整理されたように感じられたことと関係しているようにも思われる。日本語でそれに対応する知識を与えられなかっただけに余計である。（『日本の英語、英文学』）

英文法に対する寿岳の態度は、外山の見解を裏書きします。寿岳が実証性と客観性に高い価値を置いたことは、明治期にお雇い外国人として帝国大学で教鞭をとったバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）に、日本語学を築いた功績を認めたところからも明らかです。寿岳は終戦直後の1945年9月に、次のような意見を発表しました。

明治十九年の春に、王堂が、文科大学で日本語の先生になったということは、いろいろな意味で興味が深い。それは、一面では時の文部大臣森有礼や、文科大学学長外山正一の進歩思想を反映しているし、また、当時の日本の学術が、日本語さえ外国人から学ばねばならぬほど水準の低いものであったことをも物語っている。国家に対する侮辱だといきまく国学者、またそうした国学者に迫随して、いたずらに憤慨する反動者流もでてきたが、わが国の真に科学的な国語研究の基盤は、王堂によって確立されたというのが真相であり、上田萬年、金沢庄三郎、岡倉由三郎、佐佐木信綱、新村出など、わが国の歌学や国語学や言語学などに新風を拓いた古人今人は、みな王堂の講筵につらなつたか、さもなければ身に近くその学恩を受けた人たちばかりである。（「王堂と八雲」）

英語の文法書をもとに、英語の読解力だけでなく、科学的な思考法も身に付けた寿岳は、購読していた英語学習雑誌に関西学院の紹介が載っていたことがきっかけとなり、関西学院高等学部英文科へ進学します。入学したのは1919年4月のことであり、教員の一人に佐藤清（1885-1960）がいました。佐藤は仙台出身で、東京帝国大学文科大学英文科で夏目漱石の講義を聴講し、1913年から1923年まで関西学院で教鞭を執りました。この間に1917年4月から1919年3月まで、関西学院から留学のために英国へ派遣されます。第一次世界大戦末期のロンドンで、大英図書館に通って英文学を研究し、社会主義者であり、ブレイクの愛好家でもあったエドワード・カーペンターと親交を結びました。佐藤が帰国した1919年3月の翌月に寿岳は関西学院に入学したことになり、寿岳が在学した期間に、佐藤はジョン・キーツ、パーシー・ビッシュ・シェリー、ウィリアム・モリス、ウィリアム・ブレイクについて精力的に論文を発表します。寿岳がウィリアム・ブレイクをテーマとして卒業論文を執筆し、関西学院を卒業するのは1923年の3月であり、翌月の4月に佐藤も関西学院を退任し、その後、東京女子高等師範学校教授、京城帝国大学教授、東洋大学英文科教授を歴任しました。二年間の英国留学を終えて帰国したばかりの佐藤から、ブレイクを含む英国ロマン派詩人とウィリアム・モリスについて、寿岳は多くの知識を得たものと推測できます。

## （2）ブレイク研究への助走

卒業論文のテーマにブレイクを選んだ寿岳は、『ウィリアム・ブレイク』の著者である柳宗悦と初めて会います。その経緯について、寿岳は次のように語ります。

あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた私が、関西学院文学部に在学中、英語科中等教員の試験を受けに上京した折を利用して、赤坂高樹町のお宅に柳さんを訪ね、ブレイクの版画複製や書物などを見せて貰ったのは、大正十二年二月二十四日（土曜日）の午後であった。その頃柳さんは面会日をきめていたので、もし面会日でなくて会って貰えなくてはとの懸念から、大学病院に入院中の足助素一氏に紹介状を書いて貰い、中学時代の同窓であり、当時有島武郎氏の家にはいた岩瀬法雲と一緒に尋ねたのであった。柳さんは初対面のこの二青年を快く引見してくれた。その日の私の日記は、柳さんを「親しい感じの人」と描き、「宗教の話に時移り、日の暮れかかる頃帰る」とも記している。（『絵本どんきほうて』由来）

足助素一（1878-1930）は叢文閣の創業者で、有島武郎と親交がありました。寿岳が言及した『宗教とその真理』と『宗教的奇蹟』は、どちらも叢文閣から刊行されており、足助素一に紹介状を書いてもらうという寿岳の判断は極めて的確だった、と言えます。

寿岳は「あの画期的なブレイク評伝によって柳さんの名を知」った、と書きました。つまり、柳の『キリアム・ブレイク』を読んでブレイクに関心を持ったのではなく、既にブレイクに関心を持っていたところに柳の『キリアム・ブレイク』と出会い、柳宗悦という名前を心に留めた、ということです。既に見ましたように、寿岳がブレイクに関心を持つきっかけとなったのは、山宮允によるブレイクの訳詩でした。寿岳はブレイクを題材として卒業論文を書くことを、関西学院の二年生の頃に考え始めたようです。寿岳が柳に引き寄せられたのは、柳の『キリアム・ブレイク』に出会ったためではありますが、それ以上に柳の宗教哲学の研究に魅了されたからだ、と寿岳は言います。これは、ブレイクに対する寿岳の態度を考えると、重要な手掛かりとなります。

日本におけるブレイク受容史において、ブレイクに引き寄せられた詩人として、三木露風（1889-1964）と千家元麿（1888-1948）を挙げるすることができます。いずれもブレイクの『無垢の歌と経験の歌』に共感した、という共通点を持っています。しかし、善と悪を相対化し、善と悪を切り分ける規準を設定することそのものに、差別と争いの原因を見てとったブレイクの思想を、彼らがどこまで理解していたかどうかは疑わしい、と言わざるを得ません。象徴詩人として知られる三木露風は、ブレイクの影響下で恋愛詩を書きましたが、それは情緒的な恋愛詩でしかありませんでした。ブレイクが、想像力を駆使するための精神と身体的自由こそがキリスト教の福音である、と説き、教会を神と人との間に介入する権力機構とみなしたのに対し、露風はトラピスト修道院に入ってカトリックに帰依し、聖職者を信頼して教会の教えを守る喜びを詩に歌いました。千家元麿はブ

レイクの「無垢」という概念に共感し、ブレイクの作品を「楽しい芸術」と呼びます。ブレイクにおいて「無垢」と対になる「経験」の世界に千家の目が向いていたならば、18世紀英国の政治と宗教に対するブレイクの熾烈なまでの糾弾と社会改革を望む強い意志に気が付いたでしょうし、ブレイクを指して「楽しい芸術」という表現を使うことはできなかったことでしょう。また、ブレイクが『天国と地獄の結婚』(The Marriage of Heaven and Hell, 1790)に書き記した「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉が持つ政治性を理解していたならば、第二次世界大戦期という殺戮と破壊の時代に、ファシズムの波に押し流されるようにして、戦争賛美の詩を次々と発表するというのを、千家はしなかったはずで、三木露風も千家元麿も、ブレイクの社会改革者としての側面を見落とししたという意味で、ブレイクを表面的にしか理解していませんでした。その原因は、彼らの関心がブレイクの詩的表現にとどまり、その思想に迫ろうとしなかったところにあります。

三木露風や千家元麿の事例とは異なり、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた」という寿岳の言葉から、寿岳のブレイクに対する関心がブレイクの思想にまで及んでいたことが見てとれます。なぜなら、柳が1910年代後半から1920年代にかけて続々と発表した神秘主義思想を中心とする宗教研究の論文は、ブレイク研究の延長線上にあるからです。たとえば、『宗教とその真理』に柳は次のように書きました。

余は例へば基督教の存在が直ちに仏教の非認であるとは思はぬ。一宗の存在が只他宗の排斥によつて保たれるのは醜い事実であらう。多くの宗教はそれぞれの色調に於て美しさがある。然も彼等は矛盾する美しさではない。野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであらうか。互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩どるのである。(『宗教とその真理』)

柳は、複数の異なる宗教が存在することを、そのまま受け入れます。ある宗教が正しい宗教であつて、それ以外の宗教は墮落した宗教である、という排他的な見方を柳はとりません。むしろ、柳は、宗教と宗教との対立を醜いものとみなしました。複数の異なる宗教が共存する状態で、それぞれの宗教が持つ世界観に触れて、もの見方が多面的になることに価値を見出しました。「互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩どる」という言葉は、それぞれの土地の文化と伝統に育まれた民藝品に、多種多様な美を見てとった後の柳の活動につながります。では、なぜ、柳にとって、宗教は多種多様なのでしょうか。



宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない。特殊を無視した一般の宗教は単に架空な構想に過ぎない。或者は豊かな詩情に恵まれてゐる。或者は冥想の力に優れてゐる。或者は知解に秀で、或者は異常な想像に富んでゐる。人々は彼が個性の気質に基いて彼が宗教を持たねばならぬ。（「個人的宗教に就て」）

一人一人の個人に宿る個性を、柳は神聖なもののみなします。もし、神が存在するとすれば、個性は神から授けられたものであり、多種多様な個性が地上に存在するという事は、万物の創造主としての神の力の証となります。したがって、柳によれば、個性の多様性に比例する形で、多くの異なる形の宗教が存在し、神に関する多種多様な理解が生まれるということになります。

個性を神聖視する柳の宗教哲学は、柳のブレイク研究に遡ります。柳はブレイクについて、次のように語りました。

個性において世には何等の宗教がなく哲学がなく藝術がない。人格の偉大とは凡てその特殊的個性にある。彼が若し自己の表現を躊躇したならば彼には何等の製作がない。ブレイク自らの価値は凡て彼の異常な性情にあつた。（『キリアム・ブレイク』）

柳は宗教と哲学と芸術の源を個性に見ます。ここで柳がブレイクを形容するために用いた「異常」という言葉は、それが日常的な文脈で否定的な意味で用いられることが多いとすれば、柳はその否定的な用法を逆にとりました。一般的に「異常」とみなされるような際立った特徴こそが、柳によれば、個性の現れでした。これは、個人に特有の性質や能力を遺憾なく発揮することに価値を置く芸術観であり、志賀直哉の言葉を借りれば、「十人十色、勝手に自分の仕たい事をする」（「蝕まれた友情」）という雑誌『白樺』の方針と合致します。柳がブレイクを高く評価することができたのは、個性を規準とする評価軸が既に柳の中に定まっていたからであり、それはブレイクの宗教観と芸術観に柳が共鳴する作業でもありました。ブレイクの『天国と地獄の結婚』に、次のような言葉があります。

神を敬うことは、他人の中にある才能を、その天賦の才能に応じて互いに尊ぶことであり、最も偉大な人を最もよく愛することである。偉大な人を妬んだり中傷したりすることは神を憎むことである。なぜなら

それ以外に神はないからである。(『天国と地獄の結婚』)

ブレイクが用いた「才能」という言葉を「個性」に置き替えれば、そのまま柳の宗教論になります。「人格の偉大とは凡てその特殊的個性にある」という柳の言葉は、ブレイクの神に関する理解を要約したものだと言えます。『天国と地獄の結婚』には、「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉も見られます。「生きとし生けるものはすべて神聖」であり、人の活動を通して神が地上に姿を現すのであれば、宗教や哲学や芸術に見られる多様性は、神の意志の反映ということになります。各地に多様な宗教が存在することについて、ブレイクは次のような見解を示しました。

すべての民族のそれぞれの宗教は、あらゆるところで預言の精神と呼ばれている詩的精霊を、それぞれの民族が異なる受け取り方をしたことに由来する。(『すべての宗教は一つである』)

ここに表明されたブレイクの宗教観は、「宗教の多岐は多岐な個性の要求である。余は個性を否定する宗教の存在を是認する理由を知らない」という柳の言葉と重なります。柳は、地球上に存在する様々な宗教の価値を認めて、それぞれが自立して共存する可能性を探りました。この姿勢は、ブレイクの宗教論と軌を一にしています。宗教と宗教との確執を乗り越える一つの手がかりとして、柳は神秘体験に注目しました。

神秘の経験に於て人は宗派を持たぬ、宗派や主張は後に立場によつて加へられた作為である。神秘に於て、一切の宗教は一つである。(「宗教哲学に於ける方法論」)

「一切の宗教は一つである」という柳の言葉も、『すべての宗教は一つである』というブレイクの言葉を想起させます。柳の神秘主義思想研究には、ブレイク以外にウィリアム・ジェームズからの影響が見えますが、内容と表現の両方において、柳の宗教研究がブレイク研究の延長線上にあることは明らかです。「ブレイク評伝によって柳さんの名を知り、『宗教とその真理』や『宗教的奇蹟』によっていよいよ深く柳さんにひきつけられていた」という寿岳の回想は、ブレイクを思想家として理解する上で、最も適切な道筋を寿岳が歩んだことを物語っています。

関西学院英文科を卒業した寿岳は、1924年に京都帝国大学文学部に入学します。1925年に、英文科助教授の

石田憲次の紹介で、河上肇の長男である政男の家庭教師となり、英語を教えました。後に、寿岳は「私の青年時代は、柳、河上、この二人の優れた人物によって形成されていくと言ってもいい」と振り返ります（「柳宗悦を語る」）。当時を寿岳は次のように語ります。

ついで私は京都大学文学部英文科に進み、ひきつづきブレイクの思想研究をさらに深めていった。すでに私は岩橋静子と結婚し、大学卒業時には二児の父でもあった。経済的には大変であったが、妻とともに私は大いにはたらき、かつ研究にいそしんだ歳月であった。京大での卒業論文の題目は「ウィリアム・ブレイクの神話大系について」である。（「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」）

寿岳が京都帝国大学を卒業したのは1927年であり、ブレイク没後100年に当たります。この年の12月10日から16日まで、柳宗悦、山宮允、寿岳文章が企画して、京都博物館で「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」を開催しました。寿岳によると、この展覧会にほとんど毎日のように朝早くからやってきて、ブレイクの絵をじっくり鑑賞していたのが村上華岳であったといえます（「ブレイクと華岳」）。また、寿岳はこの展覧会に関して、柳にまつわる興味深い逸話を書き留めています。

ブレイク百年忌記念展のとき、この催しを耳にした京都大学の長崎太郎氏が、ブレイク版画の複製でなくオリジナルを一枚もっているから、貸してもよいとの申し出があった。しかし柳さんは、そんなはずはない、複製だろうと行ってとりあげない。これをもれ聞いた長崎氏は憤慨し、実物が複製かたしかめもしないで、複製だろうときめてかかるような人間には、貸せと言っても貸してやらぬと、かたくなになってしまった。長崎氏、今は故人であるが、京都市立美術大学の学長をつとめていたその晩年、私との間に文通があり、当時のいざこざを水に流してもらったが、柳さんの強烈な自信ゆえに生じたこの種の感情のもつれは、私の知るだけでもずいぶん多いようである。（「宗悦・柳さんのおもかげ」）

長崎太郎（1892-1969）は京都帝国大学法科大学を卒業後、日本郵船に入社し、駐在員としてアメリカに長く滞在しました。この間にブレイク関係の資料を熱心に収集しました。帰国後、武蔵高校教員、京都帝国大学学生主事、山口高校校長を経て、京都市立美術専門学校校長として新制大学昇格作業を行い、京都市立美術大学学長を務めます。これらのブレイク関連資料の一部は、その後、京都市立芸術大学の所蔵品となり、その中には

1797年に制作されたブレイクの銅版画『夜想』(Nights Thoughts)が含まれています。寿岳が記した柳と長崎太郎をめぐる思い出からは、柳の人柄がしのばれるだけでなく、柳のブレイク研究と宗教研究から大きな影響を受けながらも、寿岳が公正な眼で柳を見ていたことが伝わってきます。

関東大震災が発生した翌年の1924年に、柳は京都市上京区吉田下大路町へ移り、さらにその翌年の1925年に吉田神楽岡へ転居しました。寿岳は柳との交流の始まりについて、次のように振り返ります。

翌年、柳さんは吉田山の東麓の神楽岡へ転宅したが、柳さんと私との交遊が密となるのは、昭和二年の十二月中旬に、京都博物館で、ウィリアム・ブレイク百年忌記念展を開くときだったその年の、春すぎてからである。そのころ、私は南禅寺山内の僊壺庵に住んでいた。吉田山東麓と南禅寺との距離は、徒歩三十分ならず。黒谷を抜けて岡崎へ出ても、鹿ヶ谷から疎水に沿い、いわゆる哲学者の道を取っても、当時は快適な散策のコースであった。記念展の出品物うちあわせのため、よく往き来した。しかし三つの学校で教え、時間的制約の多かった私が神楽岡へ赴くよりも、柳さんが南禅寺へ来る場合が、はるかに多かったように思う。(「柳さんとの日々」)

寿岳の回想によると、ブレイク没後100年記念の展覧会を開催した1927年に、寿岳は『キルヤム・ブレイク書誌』の編纂を始めました(「自装本回顧」)。京都帝国大学教授であり、言語学者であり、後に『広辞苑』の編者として知られることになる新村出(1876-1967)が、神戸で「ぐろりあそさえて」という出版社を設立した伊藤長蔵に寿岳を紹介し、『ブレイク書誌』刊行事業が始まります。『キルヤム・ブレイク書誌』の序文に、寿岳は次のように記しました。

さうして、着手以来十三ヶ月の日子を閲した今日、漸く本文全部の脱稿を見たのである。もとより私の‘ブレイク書誌’は、その完成に十八年の歳月を要したKeynes博士が不朽の名著に比ぶべくもないが、またその名著なくば私の書誌は実現し得なかつたのであるが、収載文献の数に於いて、私の書誌が、Keynes博士のそれに比し、倍を遥かに越えてゐる事實は、博士の書誌はあれど、なほこの書が決して無意義な存在ではないことを明かにしてくれるであらう。(『キルヤム・ブレイク書誌』)

寿岳が触れた「Keynes博士が不朽の名著」とは、ジェフリー・ケインズ(Geoffrey Keynes, 1887-1982)が

編纂して1921年に出版した *A Bibliography of William Blake* のことです。経済学者ジョン・メイナード・ケインズ (John Maynard Keynes, 1883-1946) の弟にあたるジェフリー・ケインズは、ケンブリッジ大学で医学を学んでいたとき、ブレイクが旧約聖書『ヨブ記』の挿画として制作した銅版画の連作に出会って、ブレイクの虜となりました。ケインズは、ブレイクが制作した詩集、絵画、銅版画、ブレイクに関して書かれた伝記、研究書、論文、随筆を、出版年代順に整理して、書誌情報を目録にまとめる作業を1908年に開始し、13年後の1921年に書籍として刊行します。完成までに13年を要したのは、書誌編纂作業そのものが時間と労苦を必要としたことに加えて、1914年に始まった第一次世界大戦にケインズが軍医として従軍したためでした。

書誌学とは何でしょうか。寿岳の定義を引用します。

最も簡明に記述するならば、それは「書物に関する科学」(the science of books) である。(「書誌学とは何か」)

関西学院と京都帝国大学の卒業論文でブレイクを論じてはいましたが、寿岳の本格的なブレイク研究は、ブレイクに関する書誌を編纂することで始まります。それは、ブレイクについて出版された「書物に関する科学」という形をとりました。寿岳によると、書誌学とは、蒐集、列举、記述、分析、結論の五つの段階から構成されます(「書誌学とその職分」)。まず、必要な文献を集めます。集めただけでは乱雑な状態のままなので、集めた文献を整理して列举しなければなりません。次に、それぞれの文献の出版地、出版社、出版年、頁数などの書誌情報を記述します。これは文献の書誌情報を一覧できるように可視化する作業です。その後、書誌情報に誤りがないかどうかを確認します。出版年が脱落したり、誤った情報が記載されている文献については、関連資料から出版年を復元し、必要に応じて、訂正します。これが分析という段階です。最後に、これらの書誌情報を年代順に並べたとき、新たな事実が見えてきます。この発見こそが、書誌を編纂した結果、明らかになる結論です。

書誌学とは、一言で言うならば、書物に関して事実を確定する作業です。ブレイク研究という領域に限定した場合、ブレイクに関する書誌の作成とは、ブレイクに関して、いつ、どこで、どのような研究書が刊行され、どのような研究論文が発表されたか、というブレイク研究史を確定することを意味します。先行研究の動向を把握して、既に何が明らかにされたのか、まだ何が明らかにされていないのか、を知らなければ、新しい研究はありえません。たとえば、凸レンズと凹レンズを組み合わせることによって、遠くのを拡大して見ること

ができる装置を発明した、と得意気に語る人物が現れたと仮定して、どのような反応が予想されるでしょうか。あなたはガリレオ式望遠鏡を知らないのですか、あなたが発明したと主張するものは、既に17世紀にガリレオによって発明されていますよ、というのが大方の反応でしょう。望遠鏡について新たな工夫をしたいのであれば、屈折式望遠鏡と反射式望遠鏡という光学望遠鏡を経て、電波望遠鏡と宇宙望遠鏡が発明されたという望遠鏡の歴史を知る必要があります。同じように、ブレイク研究史において、ブレイクについて何が明らかにされて、何が明らかになっていないのか、ということ踏まえなければ、ブレイク研究に新たな貢献をすることはできません。研究とは、常に、従来の研究に対する修正、または追加という形をとります。そのためには、従来の研究の全体像を把握しなければなりません。新説として出した自説が、50年前に出された説と瓜二つだったと判明した場合、もし、それが剽窃であったならば、研究者倫理の観点から問題外です。たとえ、もし、それが先行研究を見落としたことによる偶然の一致だったとしても、そのような重要な先行研究を見落としたことは、研究者として誇りにできることではありません。研究という営みは、先行研究の蓄積の上に成り立ちます。寿岳はケインズが編纂したブレイク書誌について、次のように言いました。

Keynes 博士が本書の編纂に着手したのは、1908年の12月、博士がまだCambridgeのundergraduateであった頃で、世界大戦争が刊行の時期を幾らかおくらせたとは言へ、出版までに実に十三年の長年月を要してある；もつて本書の規模と価値とがいかに大きいものであるかを想像し得るであらう。言ふまでもなく、書誌は文献の文献であり、当該研究の根柢をなす基礎工事である。本書はその意味に於いて、一切のブレイク文献のうち最も貴重なる文献と言ふを得べく、過去のあらゆるブレイクの文献を蔵するのみならず、未来のブレイク研究者に最も信頼すべき出発点と与へる。(『キルヤム・ブレイク書誌』)

寿岳は書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」、「最も貴重なる文献」、「最も信頼すべき出発点」と位置付けました。研究史という事実の蓄積を重視する姿勢は、科学的な研究姿勢と言い換えることができます。この研究姿勢の源は、英文法から知的刺激を受けた寿岳の中学生時代に遡ることができるかもしれません。既に見ましたように、寿岳は「学問一般に通ずる科学的な研究方法とは何かを、私はこれら一群の英文法書から学んだ」という言葉を残しています。あるいは、柳のブレイク研究の影響も想定できます。柳は『キリアム・ブレイク』の巻末に「主要参考書」という項目を設け、当時入手可能であったブレイク関連の文献を「複製本」、「活版本」、「書翰集」、「伝記」、「評論」、「雑誌」、「目録」、「複製」という見出しのもとに分類して一覧表にし、それぞれの内容

の概略を紹介しました。書誌を「研究の根柢をなす基礎工事」とみなす姿勢は、柳と寿岳に共通しています。書誌を重視する二人の姿勢は、雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン研究入門」として柳が連載した「第一篇 ホキットマン書誌略解」と、柳の依頼を受けて寿岳が後に作成した *A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan: From 1878 to 1935* (1947) にも見るすることができます。

寿岳が編纂した『キルヤム・ブレイク書誌』には、内容と形態のそれぞれにおいて特筆すべき意義が認められます。ケインズのブレイク書誌に登録された情報の中に、寿岳は日本で刊行されたブレイク関連の文献情報を埋め込みました。欧米で英語やフランス語で書かれた文献と、日本語で出版された文献とを区別することなく、寿岳はすべてを年代順に並べました。結果として、ブレイク研究史全体を見渡すことができるようになり、日本語で刊行されたブレイク関連の文献の位置付けが一目でわかるようになりました。

もう一つの特徴は、『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀です。寿岳は同書の装幀について、次のように回想します。

表紙の材料としては、特装本は青田君の織った紬、並装本は皮と紺紙の四半装幀ということに伊藤氏と私との意見が一致して、題箋、扉などの意匠は柳さんに一任することになった。（「自装本回顧」）

私の書誌は、本文も挿画も全部鳥の子を用い、印刷にはヨーロッパ中世の揺籃期活字本に則って rubrication（朱刷）を施し、装幀も柳宗悦氏の指揮に従ったため、少くともヨーロッパ文芸に関して日本で出版された他のいかなる書物よりもすぐれた芸術的な効果を持ちえた。（「総合芸術としての書物」）

青田とは染織家の青田五良（1898-1935）であり、工芸家の黒田辰秋とともに、柳の提案を受けて、1927年に上賀茂民芸協団の一員として活動しました。寿岳の証言から、紙とインクと活字と表紙とその他の装幀について、寿岳と柳と伊藤が知恵を出し合って、書物としての最終的な形態が決定されたことがわかります。結果として、表紙に紬を用いた特装本は1冊70円、皮を用いた並装本でも1冊60円という高価な書物となり、発行部数は200部の限定版であったため、ブレイクの研究史を世に広める、という本来の目的を達成することができたか、という点については疑問が残ります。しかし、寿岳と柳にとって、内容だけでなく、外的な形態にも心血を注いで書物を作ったという意味では、その後の向日庵私版本や雑誌『工藝』の制作につながる先駆的な企画であった、と言えるでしょう。

### (3) 雑誌『ブレイクとホキットマン』

1929年5月に柳は濱田庄司とともにシベリア鉄道でヨーロッパへ向かいます。旧知のラングドン・ウォーナー (Langdon Warner, 1881-1955) にハーヴァード大学での講義を委嘱されたためです。英国到着後、濱田はバーナード・リーチ (Bernard Leach, 1887-1979) の工房にとどまったので、柳は大西洋を一人で渡ってアメリカに向かいました。伊藤長蔵から資金援助を受けた柳は、講義を行うかたわらで、アメリカの詩人であるウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) に関する文献を収集しました。この時に集めた資料をもとにして、柳は雑誌『ブレイクとホキットマン』に「ホキットマン書誌略解」を書くこととなります。

雑誌『ブレイクとホキットマン』誕生の経緯について、寿岳は次のように語ります。

今からふりかえてみると、1927年の12月、恩賜京都博物館で、百年忌記念のブレイク展を開催したのを契機に、ブレイク・ホキットマン両詩人を結ぶ研究誌を出そうじゃないかとの発想は、柳と私の二人にあった。そして、ブレイクに関しては私が、ホキットマンに関しては柳が、内容の責任をもつことにきまっていた。(「柳宗悦と英米文学とのかかわり」)

雑誌『ブレイクとホキットマン』は1931年1月に創刊され、1932年12月まで続き、全24冊が刊行されました。『キルヤム・ブレイク書誌』の装幀に寿岳と柳が向けた情熱は冷めておらず、『ブレイクとホキットマン』の装幀も考えに考えぬかれたものとなりました。寿岳は1巻1号の「雑記」で、次のように説明します。

私の考案を中井商店の濱阪誠一君に伝えて越前へ注文した紙は、見らるゝ如く実に立派なものである。無論外国にも十分に誇り得られる。漉標の鍵は柳さんの考案で、‘真理を開く’ことの象徴。それにブレイクとホキットマンの頭文字を配した。なぜこんな贅沢な紙を使ふかと怪しむ人には、キルヤム・モリスが‘ケルムスコット・プレス設立の主旨’中に述べてゐることがよき答へとなるだらう。これもいづれ悉しく書きたい。表紙と題扉の意匠も柳さんのもの、木版彫刻は黒田辰秋氏を煩はした。刷りあがつたら、私達夫婦が一々丁数を調べて糸で綴ぢる。(「雑記」)

特別に発注された越前産の鳥の子紙には、BとWと鍵の図案の透かし模様が入りました。鍵の図案は、1931年



に刊行された『ブレイクとホキットマン』第1巻全12冊の表紙にもあしらわれました。1932年の第2巻の表紙には扉が配されたので、寿岳の言葉を借りるならば、「真理を開く」鍵と開かれる扉が1巻と2巻の表紙を飾ったということになります。扉の図案は、ブレイクが『エルサレム』(Jerusalem, 1820)の口絵として制作した図版に類似しており、柳が表紙の意匠を手掛けたこととあわせて考えるならば、ブレイク研究者としての柳がブレイクの図版を手掛かりにして、扉の図案を用意した可能性が考えられます。一方、寿岳は装幀一般について、ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)とケルムスコット・プレスに言及しました。詩人であり、工芸家であり、社会主義者であったモリスは、理想的な書物を出版するために、1891年に印刷工房を設立し、ケルムスコット・プレスと名付けます。モリスは「理想の書物」という随筆の中で、美しく読みやすい書物を作るために、文字の色、配置、余白について指針を示しました。余白に関するモリスの言葉を引用します。

すなわちその法則とは、ページの内側(綴じ目の方)の余白は最小にとり、天の余白はこれより広く、外側はさらに広く、そして地の余白を最大にとらねばならぬというものである。(「理想の書物」)

基本的に画数の少ないアルファベットと、画数の多い漢字や縦につながる形態上の特徴を持つ平仮名とでは、文字としての表記上の性質が異なっており、欧文活字の組み方をそのまま漢字仮名交じり文に当てはめることはできません。しかし、雑誌『ブレイクとホキットマン』の余白に関する限り、概ねモリスの指針に従ってページレイアウトが組まれたようです。このようにして、材料と装幀の両方において、寿岳と柳が工夫を凝らした紙面が刷り上がると、寿岳夫妻が手仕事で製本作業を行いました。寿岳は当時を次のように回想します。

これは私の主張もあって、簡単な、真ん中を三ところ絹糸で綴じるというのではありますけれども、五百部を全部手製本するというのは大変なことで、初めのうちは柳夫婦が南禅寺の北門にあった私の住居へやってきて、そして四人が、ぶすぶすぶすぶすと針で穴をあけては絹糸で綴じかがるという仕事をしていったんですね。ところが、これは大変だといちばん最初に音をあげたのは柳さんで、兼子夫人は、私は器用で針仕事もうまいもんだから、と言って頑強にやり通したのには感心しました。(「柳宗悦を語る」)

製本は、私たち夫婦が手綴じした。時には兼子夫人を伴って柳宗悦も応援にやってくる夜があった。そういう時、妻はよくピフテキを焼いていた。娘は今も語る。「あの頃は、そういう方面には柳さんの民芸の影

響はまだ受けてなかったんで、そのピフテキをのせたお皿も、白地に水色の線のはいったつまらん西洋皿だった」。(「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い」)

『ブレイクとホキットマン』の当初の発行部数は500部です。寿岳は1巻2号の編集後記に、創刊号が刷り上がったのが1月14日の夕方であり、柳夫妻の応援を得て、すべての製本作業を終えたのは16日の午後だった、と書いています。

装幀と製本に情熱を注いだ寿岳は、当然のように、内容の充実にも情熱を注ぎました。『ブレイクとホキットマン』1巻1号で、寿岳はブレイク研究の骨子を説明します。

本誌に於いて私が企ててあるブレイク研究は、次の四部に分れる：

- A. 翻訳
- B. 伝記
- C. 評論
- D. 書誌

誰もがブレイクを日本語で読めるやうにしたいとは、私の久しい間の念願である。それゆえ私は主力を翻訳に傾けたい。(「ブレイク研究への序説」)

寿岳がここで示した四部構成には、科学的にブレイクに取り組もうとする書誌学者としての寿岳の姿が見えます。「主力を翻訳に傾けたい」と述べた寿岳は、翻訳の方針について、次のように述べます。

私はブレイクが我々に書き残した一切の文字を、私の解釈に従って、出来るだけ忠実に、美しい所は美しく、醜い所は醜く、しかし語句よりは思想の伝達を主として、原文の年代順に訳出してゆきたいと思ふ。(「ブレイク研究への序説」)

「原文の年代順に訳出してゆきたい」という寿岳の意志表明は、書誌学者として譲れないところだったのかもしれません。しかし、結果として、ブレイクの特徴がそれほど顕著でもなく、またブレイクの言葉として興味深いものがそれほど多く含まれているわけでもない作品が、優先的に訳出されることになりました。これがこ

の雑誌を展開する上で、凶の結果をもたらした可能性を考えざるを得ません。寿岳は翌年の『ブレイクとホキットマン』2巻2号に、「過去一年間に約六十名の読者を減じた」と書きました。最終号となる2巻12号の編集後記には、「たうとう五百の数が半分にまでなつてしまひました」という寿岳しづの言葉が載っています。読者数の減少と掲載内容の選択との間に因果関係がない、と言い切れるでしょうか。年代順という原則のもとで寿岳が訳出した『ブレイク小品詩集』(*Poetical Sketches*, 1783)と「ブレイク初期の散文」と『月の中の島』(*An Island in the Moon*, 1784)に、読者をつなぎ留めるだけの魅力があった、とは思えません。ブレイクの作品群を全体として眺めたとき、これらは、ブレイク研究の文脈では、それぞれ重要な意味を持つ作品ではありますが、『無垢の歌と経験の歌』や『天国と地獄の結婚』に比べれば、いずれもおもしろさに欠ける、と言わざるを得ません。『ブレイクとホキットマン』を購読してみようと思ひ立つ読者が待ち望んでいたのは、寿岳の眼を通して描かれたブレイクの伝記であり、評論ではなかったでしょうか。寿岳のブレイク伝の連載が始まったのは2巻8号であり、翌々月の2巻10号には、経営困難のために休刊する、という通知が掲載されました。この間に、1931年9月に寿岳しづと子息潤が腸チフスで入院し、看病にあたった寿岳文章も10月に入院することになり、12月まで退院できませんでした。このような予測できない緊急事態があったにせよ、もっと早い時期からブレイクの伝記を掲載したり、年代順にとらわれずに、ブレイクの代表作とされる『無垢の歌と経験の歌』や柳が夢中になった『天国と地獄の結婚』を優先的に訳出するという判断をしていれば、『ブレイクとホキットマン』はもう少し長く続いたのかもしれない。

さて、伝記の方針について、寿岳は次のように決めました。

Bの伝記に於いて私の企ててゐるのは、能ふかぎり正確な客観的記述である。こゝでは人間としてのブレイクが、その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて、ありの儘に描き出されるであらう。私はそれを、謂はゞ一個の飾りなき裸像であらしめたい。我々はそれに、我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべきだと私は考へる。(「ブレイク研究への序説」)

「正確な客観的記述」、「その長所も欠点も、凡てを世の批判に委ねて」、「ありの儘」、「飾りなき裸像」という表現から、偉人としてブレイクを誉めたたえるのではなく、この世に生きた生身の人間としてブレイクを描こうという寿岳の意図が見えます。さらに、「我々自身の欲する衣を被せることによつて、自己のブレイクを所有すべき」という言葉には、事実の記録としてのブレイク像が確立された後、そのブレイク像をどのように解釈す

るかという主体性は、一人一人の読者にある、という考え方がにじみ出ています。明治の文明開化と欧化政策のもとでは、欧米の文学を模範として、その模倣に励むことが推奨されました。これに対し、寿岳は、一人一人の日本人読者がそれぞれの価値観に基づいてブレイクを吟味し、理解することを促しました。

同じような姿勢は、寿岳が打ち出した評論の方針にも見ることができます。

私は能ふかぎり心を虚しうして先づブレイクの声に聞き、しかる後私に与へられる最善の愛と理解とを語らう。また許されるならば、ブレイクと闘ふことをすら敢てしよう。かくして現れるブレイクは、私の思想と生活との中に血肉となつて生きるブレイクである。(「ブレイク研究への序説」)

「心を虚しうして先づブレイクの声に聞き」の部分は、読者の偏見と先入観でブレイクを歪曲することなく、ブレイクを客観的に理解しようとする努力を意味します。そして、そのようにして理解した後は、読者自身の価値観で「ブレイクと闘ふこと」を辞さない、と寿岳は言います。所謂先進国であり、列強諸国の中でも大国とされる英国の詩人だからとあって、ブレイクの言葉を鵜呑みにするのではなく、ブレイクの言葉と対等に対話することを通じて、「思想と生活との中に血肉となつて生きる」ブレイク理解を寿岳は目指しました。

寿岳がここで用いた「血肉となつて」という表現は、『ブレイクとホキットマン』1巻1号の編集後記に、柳が記した言葉と呼応します。柳は言います。

発刊の趣意書でも書いておいたが、私の考へでは外国の文学を取り扱ふ場合、研究が只西洋人の書いたものに精通する丈ではどうもつまらない。又さう云ふやり方では二義的な事より出来ず、又何も新しい事を加へる事が出来ない。私達が外国文学を取り扱ふ場合はやはり東洋的に見るとか、東洋人としての吾々に肉となり血となるものを書くとか、さう云ふ点迄入らないと、何も文学が身につかないと思ふ。学者の通弊は只知るに止つて体得しない点にある。(「雑記」)

外国文学との接し方について、「西洋人の書いたものに精通する丈」で「知るに止つて体得しない」あり方を、柳は「学者の通弊」と呼びました。そして、これと対置する形で「東洋的に見るとか、東洋人としての吾々に肉となり血となる」あり方を、目指すべき方向として示しました。外国文学が「吾々に肉となり血となる」とは、外国文学に接することで得られた知見が、社会生活に応用され、居心地のよい社会環境を実現するための有効

な手掛かりとして活用されること、と言い換えることができるでしょう。外国文学に対するこのような接し方の源流は、夏目漱石に遡ることができます。漱石は、英文学徒であった若い頃を振り返って、次のように言います。

近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです。まして其頃は西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲従して威張つたものです。だから無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男が比々皆是なりと云ひたい位ごろごろしてゐました。他の悪口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつたのです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、其評の当否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を触れ散らかすのです。つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、余所々々しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです。

けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威張つてゐるのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽を身に着けて威張つてゐるやうなものですから。（「私の個人主義」）

漱石は、西洋由来の知識を十分に理解しないままに、他人の知らない知識を知っていることをひけらかす様子を、「無暗に片仮名を並べて人に吹聴して得意がつた男」と揶揄し、かつての自分自身の姿である、と述べます。「丸で考へずに」、「腑に落ちやうが落ちまいが」、「鵜呑」、「機械的の知識」という一連の表現から、主体性もなければ、批評精神もなく、知識を持っていることを自慢するだけの利己的な人物像が浮かび上がってきます。はったりとこけおどしの道具として知識を振り回す輩と、そのような輩であった過去の自分自身とを漱石は「孔雀の羽を身に着けて威張つてゐるやうなもの」と一刀両断にします。そして、漱石が到達した外国文学との接し方について、次のように言います。

たとへば西洋人が是は立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の参考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではないのです。私が独立した一個の日本人であつて、決して英国人の奴婢でない以上はこれ位の見識は国民の一員として具へてゐなければならぬ以上に、世界に共通な正直といふ徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見

を曲げてはならないのです。(「私の個人主義」)

一人の読者として英文学の作品に接して一つの意見を持ったとき、英国の批評家が何を言おうと「私は私の意見を曲げてはならない」とする立場を、漱石は「自己本位」と名付けました。近代日本が明治の欧化政策で始まったことを考えれば、欧米の文学を前にして「自己本位」の姿勢を保つことは容易ではないかもしれません。柳は1957年に「日本の眼」という随筆で「外国に学ぶのはよいが、それが崇拜となり追従となつては、文化の独立はない」と警告を發しました。桑原武夫は1959年に、雑誌『思想の科学』に「研究者と実践者」という随筆を發表し、「外国の知名の学者がくると、ご高話拝聴という形になるのはもうやめにしたいという気はする」と書いており、明治の文明開化からアメリカ軍による占領期を経て、日本に根強く存在し続ける欧米の「ご高話拝聴」という圧力の大きさが感じられます。しかし、寿岳は、この圧力に屈することなく、寿岳自身の眼でブレイクをとらえ続けました。

#### (4) 寿岳文章のブレイク理解

寿岳のブレイク理解は、漱石の言う「自己本位」型の研究姿勢の系譜の上にあります。その特徴を、大乘仏教と生活という二つの言葉を手掛かりにして、考えてみたいと思います。

寿岳はブレイクについて次のように語りました。

幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じるのはまことに当然である。

[中略] 彼は大乘仏教的であるがゆゑに、極めて肯定的であり、積極的であり、生命的である。法則によつてのみ律せられる小乘的な世界は完全に揚棄せられて、大胆な衝動をそのままに肯定し美化し莊嚴して一切智の殿堂に到らしめる教へを、十九世紀初頭の西欧に於いて、ブレイクほど力強く熱心に説いた人は数多くあるまい。(「ブレイク研究への序説」)

寿岳は「大乘仏教の經典に親しんできた」ことと、ブレイク理解とを結びつけ、大乘仏教とブレイクの思想とが似通っていることを指摘しました。寿岳はブレイクの特徴を、「肯定的」、「積極的」、「生命的」、「大胆な衝動」という言葉で表現します。ブレイクが『天国と地獄の結婚』に「生きとし生けるものはすべて神聖である」という言葉を記したことは、既に見ました。寿岳は、あらゆる生命を尊重するブレイクの思想を、大乘仏教に引き寄

せて理解します。さらに、「法則によつてのみ律せられる小乗的な世界」をブレイクは発展させて高めた、と寿岳は言います。この言葉の源も、ブレイクの『天国と地獄の結婚』にたどることができます。

イエスが十戒をどのように認識したかを聞くがよい。彼は安息日を無視し、安息日の神を蔑ろにし、彼の為めに殺された人々を殺したではないか。姦淫をして捕まった女に律法を適用しなかったではないか。彼を支えるために他人の労働を盗んだではないか。ピラトの前で弁明しなかったことで偽証をしたではないか。弟子たちのために祈りをする時、また、宿を貸すことを拒否した人々の家を出る際には、足の塵を払い落とすように弟子たちに命じる時、彼は隣人の物を欲したではないか。私は言うておく。これらの十戒を破ることなくいかなる徳もあり得ない。イエスのすべてが徳だった。そして律法によってではなく、衝動によって行動したのだ。(『天国と地獄の結婚』)

十戒とは、旧約聖書において、神がモーセに与えたとされる十項目の掟です。旧約聖書の神は、モーセを通して、イスラエルの民が十戒を守ることを求めました。十戒は、安息日に仕事をしてはならない、人を殺してはならない、姦淫をしてはならない、盗みをしてはならない、偽証をしてはならない、隣人のものを欲しがってはならない、などの禁止の命令から構成されます。これに対し、新約聖書では、イエスはこれらの禁止の命令を破った人物として語られます。生命や生活が掟によって脅かされる時、生命や生活を守るために、イエスは掟を破ることを選びました。イエスにとって、宗教や社会の掟は、人々の暮らしを保護することを目的として設定されているのであり、その逆ではありません。掟と暮らしとが衝突する場合は、掟を変えていかなければなりません。そのような意味で、イエスは、当時のユダヤ教社会に反抗する反逆者でした。

言葉は、このように状況に向かって発せられるときには、明らかに、一つの行動なのである。そしてイエスの言葉を行動の一コマとしてとらえる者は、さらに、イエスの活動全体をも、その歴史的状況に立ち向かったものとして理解することができるだろう。そうしてはじめて、イエスは何故殺されたかが理解できる。イエスは、権力によって逮捕され、殺された反逆者だったのだ。権力の側にいわせれば、どうしてもつかまえて殺しておかねばならないような男だったのだ。(田川建三『イエスという男』)

ブレイクの『天国と地獄の結婚』は、反逆者としてのイエスに注目します。『天国と地獄の結婚』では悪魔が

登場し、律法の遵守を唱える天使と対話を行います。この対話で、悪魔は天使に対して、反逆者としてのイエス像を説き、イエスは「徳」を体現しており、「衝動」から行動した、と説明します。なぜ、悪魔がイエスについて語るのでしょうか。天使は律法に基づく宗教と社会のあり方に疑問を持っておらず、したがって、体制側にとっての「善」を代表します。これに対して、体制に異議を唱え、反抗する者は「悪」であり、そのようなものとしてイエスは十字架に掛けられました。だから、『天国と地獄の結婚』では、悪魔がイエスの代弁をします。現在の秩序のあり方に満足せずに、問題を見出すものが「悪」であるならば、新しい秩序の可能性は、常に「悪」によってもたらされる、と言えるのかもしれませんが。

『天国と地獄の結婚』は1790年頃に制作されたと推定されます。フランス革命と恐怖政治の時代であり、『天国と地獄の結婚』に見られる「善」と「悪」とを相対化する視点は、このような環境と関わりがあると考えられます。体制側から見て「悪」とされる革命勢力は、アメリカに独立を、フランスに共和政をもたらし、血筋によって人生が決定される身分制社会から、当事者が話し合いで物事を決定する市民社会へと、社会のあり方を変革しました。その一方で、同じ革命勢力が権力欲と支配欲にとらわれたとき、見解を異にする勢力を「悪」とみなして粛清する恐怖政治が出現しました。「生きとし生けるものはすべて神聖である」という原則を実践するためには、価値観の異なる存在と共生する方法を考えておかなければなりません。万物を肯定するブレイクの思想について、寿岳はさらに考察を進めます。

しかしブレイクに於ける生命の肯定は、他を犠牲にしても自己の欲望を充足しようとする利己的なものでは決してない。（「ブレイク研究への序説」）

ブレイクは1790年代に「悪」に積極的な価値を置き、革命を支持する作品群を次々に制作しました。しかし、1800年代になると「利己心」(Selfhood)の制御を作品の中心に据えるようになります。ブレイクの思想的変遷を、寿岳は次のようにまとめました。

この世の有情非情は、みなブレイクの心の眼に人間の神聖な形となつて現れる。山川草木が悉く人間に外ならないのである。かくしてブレイクの思想は‘罪の赦し’と‘私の寂滅’とを基調とする大悲の仏心に昇華して已む。（「ブレイク研究への序説」）



ここで寿岳が用いた「罪の赦し」という言葉は、ブレイクが『両性のために：天国の門』(*For the Sexes: The Gates of Paradise*) に書き込んだ「それぞれの悪徳の互いのゆるし/そのようなものが天国の門である」という言葉に、また「私の寂滅」はブレイクの『ミルトン』に見られる「利己心の滅却」(Self-annihilation) という言葉に由来するものと思われます。どちらも、ブレイクにおいては、価値観の相違が原因となって生じる争いを回避し、相互寛容を実現するための重要な鍵概念です。寿岳はこれらを的確に把握した上で、ブレイクの思想を「大非の仏心」という仏教の用語に接続しました。

ブレイクと「東洋の汎神論的な詩」との類似を指摘したのは A. C. スウィンバーン (A. C. Swinburne) であり、「東洋の神秘主義思想と一致する」と言ったのはフォスター・デイモン (S. Foster Damon) でした。ブレイクと仏教とを結びつけること自体は、特に珍しいことでもなく、また、これらの先行研究の影響を受けて、寿岳が仏教の枠組でブレイクを理解した、というわけでもないでしょう。寿岳の生い立ちを振り返れば、「幼い時から大乘仏教の經典に親しんできた私が、ブレイクに特別の愛着を感じず」という寿岳の言葉は、額面通りに受け取ってよいと思います。寿岳のブレイク理解から見えてくることは、アメリカ独立戦争とフランス革命という激動の時代にあつて、理想的な社会の仕組みを考えてブレイクがたどりついた利己心の滅却と相互寛容という鍵概念が、煩悩からの解脱を掲げる仏教の教義と重なるところが多い、という事実です。この事実は、19世紀から20世紀初頭にかけて、利己心と競争原理に基づく帝国主義と植民地主義が世界を席卷していた時代にはブレイクの理解が遅れたこと、また、そのような時代に、仏教の専門家でもある寿岳がブレイクに傾倒したことをあわせて考えるならば、二重にも三重にも興味深いと思います。

寿岳のブレイク理解を考える上で、第二の手掛かりとなるものは生活です。寿岳は「ワイマールの枢密顧問官であつたゲーテ」と対比して、ブレイクの慎ましやかな生活を強調し、「生活と芸術とを結びつけて考へるとき、私はゲーテを尻眼にかけて通るが、ブレイクの前では無条件に頭がさがる」(「ブレイク研究への序説」と記しました。ここには、煩悩に対峙する僧侶として、求道者としての寿岳の姿が見えますが、本論では、その延長線上で、ブレイクを読むという行為そのものを寿岳が自分自身の生活の一部に位置付けたことに注目したいと思います。既に見ましたように、ブレイクは「生きとし生けるものはすべて神聖である」と宣言し、利己心がもたらす害悪を訴え、相互寛容の重要性を説きました。ブレイクの言葉を1931年の日本で読むことは、何を意味したのでしょうか。寿岳は『ブレイクとホキットマン』1巻9号の編集後記に、次のように書きました。

宇宙の生命に比ぶれば無にも等しい数千年の間に、民族は民族と争ひ、階級は階級と闘つて、線香花火の

やうに消え去つてゆく。これは耐へ難いほど淋しい事実ではないか。(「雑記」)

『ブレイクとホキットマン』1巻9号の奥付には、「九月十日印刷／九月十五日発行」とあります。この3日後の9月18日に満州事変の発端となる柳条湖事件が起きました。奥付の日付を文字通りに受け取るならば、寿岳の言葉は満州事変を受けて書かれたものではありません。しかし、ブレイクを読むことと1931年の日本を生きることが、寿岳の中で結び付いていたことがうかがえます。翌年の1932年の2月に発行された2巻2号の編集後記には、次のような言葉が見られます。

私共が本誌を刊行するのは、幾度か言を重ねてきた通り、決して道楽や趣味から出発してゐるのではない。さう言う雑誌ならばほかにもいくらあろう。良心を見失はうとする現代に、良心のありかを示し、‘静かなる小さき声’を聴けよとて本誌は生れた。その所志をあくまでも貫かずにはおかぬ私共の心である。(「雑記」)

寿岳は、当時の日本が置かれていた状況を指して、「良心を見失はうとする現代」と言いました。そのような時代にあつて、『ブレイクとホキットマン』という雑誌は「良心のありか」を示すために生まれた、と寿岳は言います。ブレイクを読むことは、良心が見失われつつある時代において、どのように振る舞うべきかを示す指針となる、と寿岳は考えていたようです。ここで寿岳が用いた「静かなる小さき声」という表現は、旧約聖書「列王記上」19章12節に由来し、そこでは、逆境にある預言者エリヤの前に、神がかすかな細い声として姿を現します。寿岳を預言者エリヤに、ブレイクを神の「静かなる小さき声」に重ね合わせるならば、雑誌『ブレイクとホキットマン』はブレイクとホキットマンを紹介するだけでなく、社会に対する警世の書という位置付けを持たされていたことがわかります。寿岳は『ブレイクとホキットマン』2巻4号で、戦争に突入しつつある時代の趨勢について、ブレイクを引きながら批判しました。

今の時代は、あまりにも軽々しく生命の厳存を冒瀆しようとする傾向にあるかの如く私には感じられる。‘生あるものは凡て神聖である’とブレイクは屡屡言ふ。一つの生命が伸び、感じ、苦しんでゐる事実には、最大な神秘がひそんでゐることを、人よもつと痛感せよ。戦争の惨禍を想像するたびに、私の心には亡びゆく生命の呻きが悲しくも響く。(「雑記」)

翌月の5月には、五・一五事件が発生し、首相の犬養毅が暗殺されました。寿岳は『ブレイクとホキットマン』2巻5号の編集後記で、絶望に近い怒りを露わにします。

この五月は憂鬱のうちに過ぎた。一日二日置きに降り続く雨。季節はづれに強い風。それにもまして吹きすさぶテロリズムの狂暴なあらし。人類は向上し進化すると言ふ浮誇の愚かしさが痛烈に感じられるのはかかる時に際してである。[中略] 蛮行、私利、強慾、ごまかし、党派根性、宗派争ひ、裏切り、軽薄、淫蕩、殺伐、鈍感、贅沢、暴圧——凡そ考へ得らるる限りの邪悪が、一たび過ぎればまた還ることのない人間の歴史を日々に汚してゆく。人類よもういゝ加減に恥を知れと怒鳴りたくなる。きのふは生命の尊貴をのみ一途に思つた私の心が、今日は生命それ自らの存在にすら望みを失はねばならぬとは、何と云ふ悲しい変化であらう。かゝる場合に生き得る唯一つの道は、頭をいたづらに高くあぐる事なく、古への托鉢者のやうに、目前数歩の地に眼を伏せ、‘静かなる小さき声’にのみ耳澄まして歩むのほかはあるまい。げにかゝる世にあつては、平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではないのである。(「雑記」)

「平凡に正しく思念して生きることすら容易の行為ではない」と書いた寿岳は、購読者数の減少による経営困難という現実を前にして、雑誌『ブレイクとホキットマン』の休刊を決断します。最終号の2巻12号の編集後記には、寿岳しづの言葉が見えます。

ぐんぐんと強く正しく一つのを突きつめる心なり態度なりを持つ人はほんに少いもの、この雑誌に払はれてゐた五十銭玉はいつたい何に使はれるのか、かう嘆息する私の方がいけないのでせうか。しかし一方では、七十銭になつてもいい、一円に値が上つてもいい、どうぞ止めないやうにとまで言つて、私共の心に暖いたのもしい心を通して下さる方々があります。今の社会の状態、今の人心の状態、否、いつの時代にあつても、かうした種類の雑誌として五百の読者は多すぎるのではないかと思ひます。これは、どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿です。初めから二百人乃至三百人位みが当然だと思つてゐたのです。(「雑記」)

「どうしてもあまく人間の本质を買ひかぶることの出来ない私の眼にうつるこの世の姿」という言葉に、寿岳

しづの冷徹な観察眼が見てとれます。寿岳文章は1943年8月13日付の「向日庵消息第十信」で「忙しい家事のひまひまに、岩波書店から頼まれて、しづ子が翻訳を続けてきましたオルコットの『四人の少女』は、一カ月ほど前急に出版不許可となりました」と書いているので、寿岳家の家事は寿岳しづが担当していたのでしょう。鶴見俊輔は「あなたは勝つものと思っていましたかと老いたる妻のさびしげに言う」という土岐善麿の短歌について、軍国主義の時代に同調するところもあった土岐善麿とは異なり、「台所を守って彼の食事の世話をしてきた妻は、食糧だけから見て、別の思いを抱いて黙っていたのだろう」（「人間と国」）と述べました。寿岳しづもまた、寿岳文章の夢と理想に寄り添いながらも、家事を通して現実をより冷静に見つめていた、と言えるのかもしれない。

#### （5）思想家としての寿岳文章

『ブレイクとホキットマン』最終号に、寿岳は次のように書きました。

愈々この短い後記を以て暫く読者諸君とお別れする。言ひたい事はこれまでに言ってきたので、私としては今改めて申上げる事もない。寄稿者となり読者となつて最後まで本誌を支持して下さい下さつた諸君に、眼頭の熱くなる思ひして唯感謝の心を贈るばかりである。これからは寒さに向ふ。片隅の日の光をも大切に、恙無き日を送つて下さい。（「雑記」）

この後、寿岳は「片隅の日の光」を守り続けようとするかのように、向日庵私版本の刊行事業に着手します。ウィリアム・モリスがケルムスコット・プレスを設立して、紙、活字、インク、ページレイアウトなどに工夫を凝らして、理想とする書物を世に送り出したように、寿岳は「向日庵発願記」で宣言します。

著者に諂ふことなく、読者に阿ることなく、射利主義の流れから高く遠く離れ、ただただ良心の声のみに耳を傾け、すぐれた内容に美しく正しい装ひを与へ、思想と工藝との二つの世界を密に結び合はせようとするのが私の願ひである。（「向日庵発願記」）

刊行された向日庵私版本には、ブレイクの複製本、式場隆三郎が翻訳したテオ・ファン・ゴッホの手紙、小泉八雲が松江と熊本から送った書簡集、さらに寿岳夫妻の和紙研究の成果となる『紙漉村旅日記』などが含まれ

ます。あわせて『向日庵消息』というパンフレットを創刊し、1933年6月の第一信から1943年8月の第十信まで発行し続けました。戦争の時代に生きた寿岳の信念は、第七信によく現れています。

とまれ私たちは責任を重んずる生活者であり、思索者であり、また実行者でありたい。歴史の自然法的な方向をのみ重んずる近代の風潮は、歴史の必然にのみ自己を託して、刻々に過ぎてゆく個々の生活の事実をあまりにも無責任に踏みこじってはいはすまいか。個人の力ではどうすることもできない歴史の力を明察しながらも、その同じ歴史が教える最も高貴な人間の生活の態度（随順者の数のいかんを問わず）に自己を服従させつつ、どんな小さな言葉や行為にも責任を持たせてゆく——今私の望んでいるのはそうした生きかたです。（「向日庵消息第七信」）

同じ時期に雑誌『工藝』を刊行し続けた柳は、国家総動員法と大政翼賛会に背を向けるようにして、朝鮮、沖縄、アイヌ、台湾の特集号を組み、文化と生活と価値観の多様性を静かに訴えました。寿岳もまた、殺戮と破壊に背を向けて、向日庵私版本として美しい書物を制作し続けました。寿岳の活動は、それ自体が「静かなる小さき声」であり、「平凡に正しく思念して生きること」の実践でした。侵略と支配が「歴史の必然」とみなされた時代にあって、寿岳は「個々の生活の事実」を守るために、その時代に生きた者の一人として、社会的責任を果たそうとしました。

戦前の英文学者の動向を探った宮崎芳三は『太平洋戦争と英文学者』の中で、英文学者は敵性文学を研究する以上、危険視されてもおかしくはなかったが、そのようなことは起きなかった、と指摘します。転向という現象も、当時の英文学者から縁遠いものでした。なぜなら、転向とは思想を持つ人に起きる現象であって、「戦争中の大多数の英語教師、英文学者の心は思想以前の状態だった」（『太平洋戦争と英文学者』）からです。宮崎によると、日本の英文学者は、少数の例外を除いて、考えるということをしませんでした。彼らは英国の英文学者の研究を手本として、英国の英文学者に認められることを目指して、勤勉に実直に英語と英文学の勉強を重ねました。結果として、多くの英文学者は信念を持たず、したがって、危険思想の持ち主と見られることもなく、特別高等警察の監視対象になることもなく、転向という現象も起きませんでした。欧米の最先端の研究を輸入することに情熱を燃やし、欧米の研究者に認められるための競争に終始し、自他の順位付けに汲々としている有象無象の英文学者とは、一言で言うならば、考える能力のない優等生の寄せ集めです。彼らは、なぜ、日本で英文学を研究するのか、英文学を研究することの社会的意義は何か、英文学研究からどのような叡智を引き出

して、どのように社会に還元すべきなのか、という社会的責任を意識することのないまま、勉強に明け暮れ、沈黙しました。沈黙した、と言えば、聞こえが良すぎるかもしれません。彼らには語るべき思想がなかったのです。

このような、いわば優等生の精神状態から卒業できない英文学者の群れを背景にしたとき、寿岳の立ち位置は鮮明になります。戦後に寿岳は次のように記しました。

ただ、ひとことつけくわえておきたいのは、半世紀以上にあたる私と文学（とりわけ英文学）とのとりくみをふりかえってみたとき、それを酵母にして自分自身の生活体験を発酵させ、日々の行動に造詣しようとの願いをつらぬいて現在にいたり、これからもその姿勢は続くであろうとの見通しである。文学は、私にとって、思考や研究とだけ結びつくものではない。人生のほかのもろもろの事象と同様、行（ぎょう）じてこそ意義をもつ。（「ダンテとブレイク」）

人文学は、高尚であることに、その存在意義があるわけではありません。世俗から遊離した無用の用であることに、意味があるわけでもありません。もちろん、それは知的遊戯でもありません。人文学は、暮らしやすい社会のあり方を考えるための思考実験の場であり、居心地の良い社会の仕組みを作るために、価値観を鍛え直す場です。そこに人文学の社会的意義があります。戦前と戦中を通して寿岳が行った活動は、ささやかではあったにしても、ブレイク研究に社会的意味を持たせる営みでした。日本の英文学者としては極めて稀有な、信念を持った思想家の姿を、寿岳文章の中に見ることができます。

（付記）本講演内容を加筆修正し、書誌情報と脚注を追加した論文は、「寿岳文章とウィリアム・ブレイク研究——日常生活の思想家」として『超域文化科学紀要』第24号（東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻、2019）に掲載予定である。